

1	生活者の暮らしの記憶から描かれる復興まちづくり-岩手県山田町の漁村集落における取り組み-	著者 ○谷口 綾子・佐藤 宏亮・野田 満・池田 智・石黒 雅之・遠藤 翼・葛野 亮・木田 恵理奈・熊谷 哲大・菅沼 結城子・陳 海韻・野上 耕太郎・三宅 朋子	所属 早稲田大学大学院
	岩手県山田町の漁村集落における復興まちづくりについて報告する。将来に向けた持続可能な復興まちづくりを考えるためには、生活者1人1人の視座を大切に、地域の歴史的、文化的文脈に沿ったものでなければならないと考える。生活者へのヒアリング調査を重ねながら暮らしの姿や資源を掘り起こし、地域住民と共有するプロセスを経て復興に向けた地域像を描いた。		
2	大槌町の風景再生計画のために -被災地の文化資源調査-	著者 ○萩原 拓也・窪田 亜矢・田中 暁子・岡村 祐・永瀬 節治・黒瀬 武史・森 朋子	所属 東京大学大学院
	大槌町は東日本大震災において大きな被害を受けた。日常の風景は失われた。しかし被災を超えて再生の希望をもたらす湧水や祭りの風景があった。そしてそれらは、歴史や地形によって支えられている。本ポスターは、被災を越えた文化資源(湧水、祭事)とそれらを支える歴史と地形に関する調査と、被災で失われてしまった日常の風景の記憶を取り戻す「記憶再生プロジェクト」、それに連動させた場の提案について報告する。		
3	中学校の総合学習の時間を活用した地域復興計画の検討 ~南三陸町を事例として~	著者 ○石川 永子・澤田 雅浩・薬袋 奈美子・石塚 直樹・定池 祐季・村上 大和・照本 清峰	所属 ひょうご21世紀研究機構
	町の復興計画の策定を支援してきた筆者が、中学校の総合学習の時間を活用して、町の未来を担う中学生を対象に、地域の復興まちづくり作成を支援してきた。若い世代の将来の夢と地元への愛着のジレンマなどに着目して、中学生の今後10年のくらしと町の復興10年を重ね合わせながら復興カレンダーを作成したり、中越の被災地の見学から集落の復興を考えたりした成果をまとめ、大人の地域復興まちづくりの論点と比較・考察した。		
4	東松島市の復興計画策定過程における住民意見の変容について -住民説明会におけるキーワード分析を通じて-	著者 ○宮木 祐任・森 英高・佐藤 剛・古山 夫・高橋 護・谷口 守	所属 筑波大学大学院
	本研究は、地形や被害の状況の異なる中、東日本大震災からの復興に向け、復興計画の策定と同時に住民意向把握のための説明会を実施している東松島市を対象に、説明会で出された住民意見等より抽出したキーワード分析から、住民意向の変容や行政からの効果的な情報提供の在り方について考察することが目的である。その結果、地区によっては時間の経過や提供された情報の増加に伴い、住民意見はより具体的な質問や要望へと遷移したことが分かった。		
5	地域知としての災害文化の伝承に関する実践的研究	著者 ○石原 凌河・松村 暢彦・藏重 良紀・加藤 佑昌・西田 拓晃	所属 大阪大学大学院
	東日本大震災の教訓として、単に防災施設を整備するだけでなく、ソフト面による対策として地域内で災害文化を伝承することの重要性があげられる。そこで、本研究では、徳島県阿南市を事例に、地域内で脈々と受け継がれている災害文化の特性や、伝承実態、及び災害文化を伝承する効果について分析し、地域知として災害の知恵を伝承する意義について考察する。また、実践例として、災害伝承を活用した防災教育プログラムについても報告する。		
6	生物多様性評価指標CBI、InVESTを用いた空間評価と都市計画への課題 -仙台市を対象に-	著者 ○菊池 佐智子	所属 東北大学大学院
	2010年の生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)では、都市における生物多様性に関する取り組みを評価するツールの一つとして、都市の生物多様性指標CBI(City Biodiversity Index)の活用を推奨した。CBIは、各都市が自らの状況を認識し対策を検討する手がかりとして使用するため、スコアの都市間比較は意味がないと言われている。本ポスターでは、仙台市を対象に現行CBIを適用し、都市の生物多様性を定量化するとともに、InVESTとの連携による、生物多様性を配慮した都市計画の可能性を議論する。		
7	市街地型貸し農園の位置付けと利用者ニーズの特性に関する研究	著者 ○河野 誠・藤田 直子	所属 九州大学大学院
	大都市の駅周辺や中心的商業地区内のビル屋上や人工地盤上に、「農」が体験できる空間が進出している。本研究ではこれらを「市街地型貸し農園」と名付け、5菜園を対象として事例調査を行い、利用者の属性や選好意識を明らかにした。特に本研究では、日本における一般的な市民農園の利用者の属性や選好意識と今回の調査結果を比較することで、「市街地型貸し農園」の利用者の意識・行動特性を明らかにすることに重点をおいて研究を行った。		
8	韓国ソウル市における都市住民による農的活動の変遷	著者 ○姜 宜仙・宮本 万理子・横張 真	所属 東京大学大学院
	農地法の改正(2002年)や都市農業の育成及び支援に関する法律の制定(2011年)を背景に、近年、韓国ソウル市において、都市住民による農的活動が注目されている。本研究は、こうした法制度の改正・制定前後における都市住民による農的活動の変遷を把握したものである。その結果、初期(1960~70年代)には都市近郊における富裕層(財閥)向けの週末農場が主体であったものが、1980年代以降には中流階級向けの週末農場へと広がり、近年では都市から農村の各所において、一般階層を対象とした週末農場や菜園農園へと、対象・空間ともに多様な広がりを見せていることが明らかとなった。		
9	「重要伝統的建造物群保存地区における町家の空間利用」の変遷に関する研究	著者 ○魏 小娥・加藤 晃規	所属 関西学院大学大学院
	本研究では奈良県橿原市今井町を取り上げて、町家の利用変化から町家の空間の特性を明らかにするとともに、今後の町家の空間利用のあり方を考察する。旧来の空間利用と現在の空間利用の比較を行い、変遷の要因を探り出す目的とする。結論として町家の空間を継続的に利用していくためには新たな方策が必要であると思われる。		

10	歴史的町並みの修景に関する提案-松江市の景観阻害物件を事例に-	
発表番号	著者 ○井上 亮・山根 大知・中野 茂夫	所属 島根大学大学院
<p>松江市の景観計画では、塩見縄手地区等が伝統美観保存区域に指定されている。しかし、一部の地区を除いては、十分な景観整備が行われているとはいえない。そこで本研究では、対象地区の街路景観について沿道の建築物と建築物以外の景観構成要素(色彩・電線類の有無・駐車場等)の観点から調査し、松江市の景観特性について明らかにすることで、松江市景観計画問題点を抽出し、改善策を検討した。</p>		
11	築地場外市場の保全・更新に向けた都市構造の把握ー築地場外市場景観調査を通してー	
発表番号	著者 ○葛野 亮・佐藤 宏亮・池田 智・遠藤 翼・木田 恵理奈・熊谷 哲大・坂本 浩気・菅沼 結城子・田口 友子・谷口 綾子・陳 海韻・野上 耕太郎	所属 早稲田大学大学院
<p>本ポスターは、東京都中央区にある築地場外市場を対象に行った、景観基礎調査の成果を基にして作成した物である。雑多な建築、人々のうごめきが魅力となっている築地において、一般客の行動調査等を通し一定の性質を導く事で、築地のまちの保全・更新をしていくための指針を模索した。本成果は、今後場内市場の移転に伴い、強い開発圧力がかかる事が予想される場外市場において、都市更新の指針を示すためのガイドラインの基となるものである。</p>		
12	考現学のデジタル化による都市空間の再解釈と可能性	
発表番号	著者 ○石黒 雅之・馬場 健誠・申 炳欣・伊藤 裕菜・大石 祐輔・斎藤 竜大・高 橋 洸介・林 泰資・山近 資成・横内 秀理	所属 早稲田大学大学院
<p>「インターネット元年」と呼ばれた1995年から15年が経過し、様々なデジタルデバイスが日常生活に実装化されるようになり私たちの身体の一部となりつつある。こうした情報の携帯技術の発達により私たちの身体を通してみる都市の姿は拡張され、かつて今和次郎が詳細なスケッチを通じて現代の社会現象を分析・解説した頃と比べ可能性が大いに広がっている。本研究は情報が錯綜する現代社会において、デジタルデバイスを用いた考現学により都市空間を再解釈し、都市デザインへの応用を模索するものである。</p>		
13	戸田市におけるウォーキング・ランニングのまちづくりの研究	
発表番号	著者 ○牧瀬 稔・富田 涼二・鈴木 伸明	所属 地域開発研究所
<p>本研究は、ウォーキング・ランニング人口が増加している戸田市において、平坦な地形を活かした安全で安心して利用できるウォーキング・ランニングコースの道路整備のあり方について明らかにしている。特に、以下の6点を踏まえて考察している。①市内の既存道路の把握②歩道を有する既存道路の把握③歩道幅員の把握④歩道形式の把握⑤市民利用施設等の位置把握⑥ウォーキング・ランニングに適した道路の把握</p>		
14	地域活性化を目指したまちづくりデザイン教育の試行	
発表番号	著者 ○三友 奈々・渡 和由・安藤 邦廣・貝島 桃代・蓮見 孝・木村 浩・五十嵐 浩也	所属 日本大学
<p>筑波大学芸術専門学群では、文部科学省採択特色GP「アート・デザイン教育による3C力の育成」プログラムを2005年度から4年間学内外で取組み、現在も発展させて取組んでいる。その取組みで行ったプロジェクトを中心に、学外において地域活性化を目指したプロジェクトを取り上げ、地域との協働手法を整理することで、まちづくりデザイン教育の可能性と課題を明らかにすることを目的とする。</p>		